

マタイによる福音書6章19-24節 「富に対するキリスト者の心」

1A 生きる情熱 19-21

1B 地上の蓄え 19

2B 天の蓄え 20

3B 心が動かされる宝 21

2A 生きている指針 22-24

1B 見ているもの 22-23

2B 仕えている主人 24

本文

マタイによる福音書6章を開いてください、私たちの山上の説教シリーズの学びは、6章の前半を終えました、今日は 19 節から入ってきます。イエス様は、前半部分において、ユダヤ人たちが主に自分を献げる活動、すなわち施し、祈り、そして断食について教えられました。主に自分自身を献げることさえ、自分の欲、人によく見られたいという欲を満たす道具に使われてしまうという危険です。そこでの処方箋、解決法は、父なる神との親密な関係です。人に見られることを求めて、人に認められることを求めてしまうのですが、人が父なる神との親しい交わりを持っているのであれば、自ずとこの方が自分の施しをご存じであればそれで十分となりますし、祈りも父が聞かれていますので、それに集中し、断食もその心が父に向っていることが大事です。ですから、私たちがいかに、日頃、毎日、神との時間を持つことがいかに重要かが分かります。何をやるのが大事なのではなく、主と共にいる時間、主と過ごす時間が重要なのです。

まず、ここの箇所全体を読んでみましょう。「19 自分のために、地上に宝を蓄えるのはやめなさい。そこでは虫やさびで傷物になり、盗人が壁に穴を開けて盗みます。20 自分のために、天に宝を蓄えなさい。そこでは虫やさびで傷物になることはなく、盗人が壁に穴を開けて盗むこともありません。21 あなたの宝のあるところ、そこにあなたの心もあるのです。22 からだの明かりは目です。ですから、あなたの目が健やかなら全身が明るくなりますが、23 目が悪ければ全身が暗くなります。ですから、もしあなたのうちにある光が闇なら、その闇はどれほどでしょうか。24 だれも二人の主人に仕えることはできません。一方を憎んで他方を愛することになるか、一方を重んじて他方を軽んじることとなります。あなたがたは神と富とに仕えることはできません。」

そして 6 章の後半は、この世の富と私たちキリスト者との関係になります。前半部分は、主と自分自身の関係であり、内側の関係ですが、私たちはこの世に生きている者たちです。後半は自分たちの周りにあるもの、世にあるものと自分たちとの関係をイエス様は語っておられます。

イエス様が弟子たちの事について、「ヨハ 17:15 わたしがお願いすることは、あなたが彼らをこの世から取り去ることではなく、悪い者から守ってくださることです。」と言われました。世が神に反対しているからといって、私たちが世から離れることを神は願っておられません。世にいながらにして、悪い者から守られることを願っておられます。しばしば言われることは、「キリスト者は、世の中にいるが、世の者ではない。」ということです。世には生きていますが、世に属していません。私が例えるなら、海の中のスキューバダイビングのダイバーと、魚との違いです。ダイバーは酸素ボンベを付けて、絶えず外の酸素を吸って、外につながっているが、海の中にいます。しかし魚は、海にいないと生息できません。世には生きていますが、神につながっています。

そして19節以降の後半部分で、今日見ていくところ、19節から24節は、「世にあるものに対する愛」と呼んでいいでしょう。神を自分の主人とするのではなく、世にあるものを自分の主人にしてしまう過ちです。「Iヨハ 2:15-17 あなたは世も世にあるものも、愛してはいけません。もしだれかが世を愛しているなら、その人のうちに御父の愛はありません。すべて世にあるもの、すなわち、肉の欲、目の欲、暮らし向きの自慢は、御父から出るものではなく、世から出るものだからです。世と、世の欲は過ぎ去ります。しかし、神のみこころを行う者は永遠に生き続けます。」そして次回、25節以降は、神を自分の主としているのに、それでも自分の必要が果たして満たされるかと不安になったり、心配したりする、思い煩いの問題について見ていきます。

1A 生きる情熱 19-21

1B 地上の蓄え 19

19 自分のために、地上に宝を蓄えるのはやめなさい。そこでは虫やさびで傷物になり、盗人が壁に穴を開けて盗みます。

イエス様は、初めに「蓄える」ことについて語られます。地上に宝を蓄えるのではなく、天に蓄えなさいと言われます。初めは、してはいけないこと、否定的な命令から始められました。ここでの「宝」は、必ずしも金銭とは限りません。自分が大切にしている、世にある貴重なもの全般のことを言えばよいでしょう。名誉や地位への愛着、身分への拘り、仕事に対する過度な愛着、またはレジャーなどの楽しいこともあるでしょう。この世でのことで、それを愛しているから、情熱をもってそのことに掛けているなら、「地上に宝を蓄える」ことになるでしょう。

そういったものは、それ自体は悪いものではないものがほとんどです。富、お金でさえ、それは決して悪いものではありません。人には、認められたいという社会的欲求もあるし、仕事もすばらしい営みです。そして、余暇を楽しむのは、体と心を休めるのにとっても良いことです。けれども、それだけであつたらどうでしょうか？世の人は、それだけになっているのです。しかし、それらのことはあくまでも、神のくださった賜物であり、神あつてこそ意味を持ちます。ところが、神を度外視して、この世のものだけで終わっている。それだけで自己完結している。これが、「地上に宝を蓄えてい

る」状態です。

分かり易く例えるなら、SNS はとても良い道具です。自分の持っている情報や情熱を伝えるための道具として有効です。けれども、フェイスブックやツイッター、インスタグラムで、またユーチューブで「いいね」をどれだけ押してもらえることができるか？ということを目的にして、そのためにいろいろな方法を練り、刺激的な言葉や画像を使ったりして釣ったりしたら、いかがでしょうか？愚かですね、中身があってこそその伝達手段なのに、その手段を目的にしたら中身がなくなっていくにしかすぎません。それが、人は生きていて、人生の中でももの見事に行なっているのです。「何のために生きていてのか？」を問うことなく、世にあるものに情熱をかけ、その宝を蓄えます。

それをしても、「虫やさびで傷物になり、盗人が壁に穴を開けて盗みます」とあります。当時、金を持っている人は、いろいろな方法で富を守っていました。両替人、今の銀行のようなところにお金を投資したり、神殿というのはお金を預けるところとなっていました。さすがに神殿から掠め奪うのは、罰が当たると思います。それが異教の神の宮では、当たり前のように行われていましたが、残念なことに、エルサレムにある神殿もその影響を受けてしまいました。それでイエス様が宮清めを行われたのです。あるいは、地面や洞窟の中に隠しました。これらが背景です。ですので、地の中に隠したり、洞窟の中に隠したら、虫やさびで傷物になります。そして、神殿のようなところに隠しても、やはり、泥棒はそれでもやって来て盗んでいってしまいます。

自分がこの世のものを宝にしても、それは必ず奪い取られたり、あるいは傷がついてしまいます。例えばスポーツ選手では、その体が傷つかない人はいないでしょう。音楽をする人であれば、その音楽を奏でる手や指を傷つけることもあるでしょう。そこだけに命をかけていたら、それらはいつも奪い取られる危険と隣り合わせなのです。しかし、信仰は奪い取られません。どんなに、いろんなことをやっても、これは誰もが奪い取ることができません。ですから、世界の多くの国でキリスト者を迫害しても、それでも人々はますます信仰に燃えていくということになります。

2B 天の蓄え 20

20 自分のために、天に宝を蓄えなさい。そこでは虫やさびで傷物になることはなく、盗人が壁に穴を開けて盗むこともありません。

19 節は、やめなさいという否定的な命令でしたが、ここ 20 節は、こうしなさいという積極的な命令です。「天に宝を蓄えなさい」ということです。天というのは、神の住まわれるところです。ですから、神の国のため、あるいは神の栄光のため、と言い換えることもできるでしょう。この世において宝のようにみなされているものを、天のために用いて行きなさい。そうやって、天において目に見えない財産を蓄えていることになるのだよ、ということです。

このことを語っている、イエス様の有名な喩えは、「不正の管理人」でしょう。自分が不正を働いて、主人から解雇されることを知った管理人は、債務のある人々のところにおいて、債務の証文の額を減らしたのです。そうすることによって、恩を売って、自分が解雇された後に雇ってもらえるかもしれない、と思いました。そして主人はなんと、その抜け目なさ、賢さをほめたのです。それは、その不正をほめたのではなく、「将来のために今の財産や機会を十分に活用する」ということです。それでイエス様は言われました、「ルカ 16:9 わたしはあなたがたに言います。不正の富で、自分のために友をつくりなさい。そうすれば、富がなくなったとき、彼らがあなたがたを永遠の住まいに迎えてくれます。」やがて来る神の国のために、今、とかく不正のために使われている富を積極的に使って行きなさい、ということなのです。

パウロもテモテ第一の手紙で、同じことを話しました。「I テモ 6:17-19 今の世で富んでいる人たちに命じなさい。高慢にならず、頼りにならない富にではなく、むしろ、私たちにすべての物を豊かに与えて楽しませてくださる神に望みを置き、善を行い、立派な行いに富み、惜しみなく施し、喜んで分け与え、来たるべき世において立派な土台となるものを自分自身のために蓄え、まことのいのちを得るように命じなさい。」善を行って、立派な行いに富むこと、惜しみなく施すこと、喜んで分け与えること、これらが後の世で富む者となり、永遠のいのちに至るのだということなのです。私たちは、聞くドラマ聖書というアプリを本当に喜んでいますが、それを可能にしたのは莫大な資金があったからで、その莫大な資金は、おそらくはその慈善団体の人々が投資ファンド関連の方々だからだと思われます。福音宣教のために惜しみなく出しているのです。また、貧しい人のために分け与えていくということ、これをしている時も天に宝を蓄えています。

そして、天に宝を蓄えれば、「虫やさびで傷物になることはなく、盗人が壁に穴を開けて盗むこともありません。」とあります。先ほど話したように、信仰の富は誰も奪い取ることはありません。そこで、ペテロはこのように言いました、「I ペテ 1:4-5 また、朽ちることも、汚れることも、消えて行くこともない資産を受け継ぐようにしてくださいました。これらは、あなたがたのために天に蓄えられています。あなたがたは、信仰により、神の御力によって守られており、終わりの時に現されるように用意されている救いをいただくのです。」

ですから、私たちは、天に宝を蓄えている者たちであり、この世に属していない者たちであり、そして、この世にあるものは、神から任されて管理しているのだと知ることがあります。ここに、人間の解決があります。人々はこの世にあるものを自分に属しているものだと思っているので、それでそこに情熱と愛を注ぐのです。しかし、私たちの情熱と愛は主ご自身に対するものであり、それゆえに今、与えられている財産や、この世にあるものは、全て自分が管理し、治めるものとみなすのです。それらのものを積極的に管理し、用いることによって、将来の御国のための備えをすることになります。

3B 心が動かされる宝 21

21 あなたの宝のあるところ、そこにあなたの心もあります。

イエス様は、とても現実的な危険について話しておられます。私たちの心が、自分の宝があるところにあるのだと言われていました。私たちは、「世のものは世のものだから、自分で何とか管理できる。」と誤ってしまいます。しかし、宝は、自分の感情、愛情、その他のあらゆる感受性をつかみ、支配してきます。そして、それらのものを愛していくことになるのです。自分は少しだけ、好きなように思っていますが、実は心から愛しています。深く心を動かしています。

パウロと共に福音のために働いていたデマスという人がいました。ルカと共に働いていたのだらうと思われます。小アジアのところから彼はパウロと共にいました。「コロ 4:14 愛する医者ルカ、それにデマスが、あなたがたによろしくと書いています。」パウロが、ローマの牢獄にいて、間もなく皇帝ネロにより、死刑にされると言うような時に、デマスは彼から去って行ったのです。「Ⅱテモ 4:10 デマスは今の世を愛し、私を見捨ててテサロニケに行ってしまった。」このようにして、今の世を愛したために、パウロを見捨てて、福音の働きから離れて、他のことをするようになってしまったのです。

2A 生きている指針 22-24

このようにして、宝があるところに心がありますが、心だけでなく、何をみているか？によっても全てが変わってきます。

1B 見ているもの 22-23

22 からだの明かりは目です。ですから、あなたの目が健やかなら全身が明るくなりますが、23 目が悪ければ全身が暗くなります。ですから、もしあなたのうちにある光が闇なら、その闇はどれほどでしょうか。

イエス様は、当時の人たちが考えている、目と体の関わりについての理解を取り上げておられます。今の私たちは、目があって、外からの光がその目を通して体内に感じることができると思いますが、その時の人々は、もっと体感を持って、目そのものが光を放っていて、それが体に光を入れているようにとらえていました。けれども、言っていることは同じです、目が見えなければ、全身が見えなくなり、暗くなってしまいます。ですから、自分の内が闇となり、その闇は実に深い闇ということになるのです。私たちが何をみているか？によって、このように私たちの深みにまで影響を与えるのです。これは、言い換えれば何を思っているのか？であります。

イエス様が、そうした心の闇をこのようにして説明しておられます。「ヨハ 3:19-20 そのさばきとは、光が世に来ているのに、自分の行いが悪いために、人々が光よりも闇を愛したことである。悪

を行う者はみな、光を憎み、その行いが明るみに出されることを恐れて、光の方に来ない。」この「愛する」は、なんとアガペが使われています。どんな犠牲を払ってでも、光ではなく闇のほうを会うということなのです。この方は救い主として来られているのに、裁くためではなく救うために来られているのに、それを敢えて拒むのですから、相当の闇ですね。

ですからイエス様は、「絶えず目を覚まして祈っていなさい」と言われました。「ルカ 21:34-36 あなたがたの心が、放蕩や深酒や生活の思い煩いで押しつぶされていて、その日が罨のように、突然あなたがたに臨むことにならないように、よく気をつけなさい。その日は、全地の表に住むすべての人に突然臨むのです。しかし、あなたがたは、必ず起こるこれらすべてのことから逃れて、人の子の前に立つことができるように、いつも目を覚まして祈っていなさい。」私たちの目が、明るくなっているかどうかであります。

2B 仕えている主人 24

24 **だれも二人の主人に仕えることはできません。一方を憎んで他方を愛することになるか、一方を重んじて他方を軽んじることとなります。あなたがたは神と富とに仕えることはできません。**

ここまで、「宝のあるところに心がある」ということ、「目が体全体を明るくする」ということを見ました。心の次が目でした。そして目の次は、「仕える」ことです。もっと意志に関わることです。

「**二人の主人に仕えることはできません**」ということ、これを分かっている人は意外に少ないです。主に対しては、ある程度、仕えてさえいれば、それほど本腰を入れなくても構わない。ほどほどにして、世についてのことも親しむべきだとします。しかし、その「ほどほど」というのは、なくなってしまいます。ほどほどではなく、全く冷めてしまいます。なぜなのか？それは、富は、全面的な服従を要求するからです。ゆえに、神に仕えるとは、全面的に献身することに他なりません。その中間はないのです。パウロが、ローマ 6 章で次のように言いました。「6:16-18 **あなたがたは知らないのですか。あなたがたが自分自身を奴隷として献げて服従すれば、その服従する相手の奴隷となるのです。つまり、罪の奴隷となって死に至り、あるいは従順の奴隷となって義に至ります。17 神に感謝します。あなたがたは、かつては罪の奴隷でしたが、伝えられた教えの規範に心から服従し、18 罪から解放されて、義の奴隷となりました。**」自分は自由なのだと思っているところが、実は誰かに仕えていて、神のことに全面的に服従していないのであれば、自分の欲や罪に仕えているのだよ、ということなのです。

だから神に仕える時も、「マル 12:30 **あなたは心を尽くし、いのちを尽くし、知性を尽くし、力を尽くして、あなたの神、主を愛しなさい。**」と主は言われてました。尽くす生活です。心においても、いのちにおいても、知性においても、力においても、尽くすのです。私たちは驚いてしまいます、献身とか、全面的に服従することなど、神とか宗教とかにおいて、まずやったことがないし、年に一回、

手を叩くぐらいのものでしょう。

ここの「富」とは、マモンという神の名になっています。富に仕えるということが、偶像に仕えるのと等しくなっています。主に仕えているのだから、敬っているのではないか？と思われるかもしれませんが、主の名を唱えながら、他方では富に仕えることほど、神に対する侮辱はありません。男女関係でいうならば、二股をかけているということです。

とても興味深い話がある本にありました。農夫がいましたが、一番いい牛が二頭の子を産みました。彼は、「二頭のうち、一頭は主に献げなければいけないと感じている。二頭いっしょに育てて、時期が来たら、一頭を売ってその売上金を主の働きのために献げよう。」と言いました。その奥さんが、「どちらを献げるつもりですか？」と尋ねると、「そんなことは今、心配する必要はない。」と言いました。数か月後、なんと一頭が死んでしまいました。農夫は言いました、「悪い知らせだ。主に献げた牛が死んでしまった。」妻は言いました、「あなたはどちらを主の牛にするか、お決めになりませんでしたよ。」けれども農夫は答えました。「いや、ずっとその牛を献げようと決めていたんだ。その牛が死んでしまったのだ。」分かりますか、主に仕えているようでありながら、実は損得勘定で動き、心は富に仕えていたのです。

このように、地上の富は、私たちと神との間に入り込んでくる傾向を持っています。ただ、主よ、主よ、と言っていれば救われるのではなく、御心を行う者が天の御国に入ることをイエス様は言われました。主よ、と言っているだけでは、本当の意味で主としているとは限らないのです。私たちは、はたして主に立っているかどうか、自分自身を吟味する必要がありますね。

そして今回は、主に仕えるにあたって、どうしても戦わなければいけないこと、「思い煩う」ことについての学びに入ります。